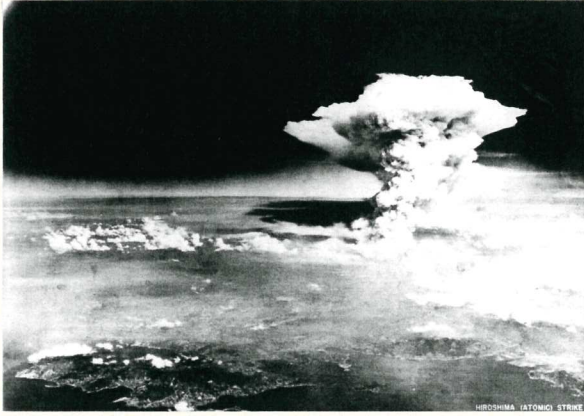


原子雲 / 米軍 撮影 (広島平和記念資料館 提供)



せんいち町内会報

千田町一丁目
町内会
090-4144-4333

ふりかえりの塔
慰霊祭 特別号

明日への語りべ

今年も、もうすぐ8月6日がやってきます。ふりかえりの塔慰霊祭はこの2年に続きコロナ禍となり、語り部会を催すことができません。町内会では慰霊碑に刻まれたあの日のことを伝承すべく、今年は2001年に亡くなられた当町の三輪元三さんの被爆記を、ご家族より寄せてもらい掲載させていただくことにしました。

被爆記録

三輪 元三

昭和20(1945)年8月6日午前8時15分、広島の上空で人類初の原子爆弾が炸裂した。私は通学途上当時の大手町九丁目、南大橋から鷹野橋へ抜ける魚市場前の路上で被爆した。これは被爆の瞬間から、受けた火傷が何とか癒えて、どうにか歩けるようになったまでの記録である。

全壊した家屋と舗装路面の間にうつ伏せのまま押さえつけられ、頭と腰が動かせない、暗闇の中で聞こえてくるのは「助けて、救いて」のかすかな叫び。

歩いている路の左上方約45度の角度から、あたり一面を包み込む青白い閃光を前面から浴びた私は、反射的に体を反転させて路上に伏せた。両腕を交差させ抱え込んだ頭の上を強い爆風が通り過ぎ、落ちてきた堅いものが背中を叩いて、バサッと家が倒れかかってきたように思えた。「こんなところで死んでたまるか!」もがきながら、呼吸するのが精一杯の状態での私の思いであった。

ゆっくり二回くらい呼吸してから試してみると、幸い両手と両膝から下は動かせる、懸命になつて脚をバタつかせ両肘で体を後に突張ってみる、「しめた! 動けそうだ!」腰を先に、続いて頭を引き抜くことができた。額の痛みなど殆ど感じないまま、うしろの明るい隙間に向かって積み重なったガラクタの中をぐぐり抜け、やっと路上に脱出した。

両手首は灰白色化し上皮が垂れ下がって痛い、顔は瞼と唇が腫れあがり鼻の皮が目の前でヒラヒラしているのがわかる。スポンの前面が焼け落ち両上脚とも皮膚が赤変して、まくれあがりホコリまみれである。足首と膝と額は釘のようなものによる軽い出血で、他は大丈夫のようだ。「ヨシ!」急に元気が湧いてきた。

取りあえず痛む顔を、腰につけていた日本手拭で頬冠りして風を防ぎ「助けて!」の声の主を探した。斜めに倒れかかった電柱と倒壊家屋との間に片足を挟まれ、左を下にしたまま右手を振って弱々しい声で救いを呼んでいる、私の20米くらい前を同じ方向に歩いていた工員服の男性だ、顔は一面火鉢の灰を被ったように変色して眉毛は無く、埴輪のように無表情で口だけ動かしていた。

駆け寄った私は、彼を挟んでいる壊れた家屋の折れた垂木に手をかけて、持ち上げよう



病棟から病人を助ける傷病軍人 (日赤構内) / 池庄司 トミ子 作 (広島平和記念資料館 所蔵)

としたが、破れた両手には力が入らない、周辺に適当な木材も無く、どうして助けてよいものか途方にふれていたら、幸い警防団の制服を着た無傷の人が二人、後の方から駆け付けてくれた。彼らは私たちの様子を見て「工員さんの救出は我々がするから、君はすぐ近くの日赤病院に行つて手当てを受けなさい」と指示した。

言われるままに50米先の日赤病院裏門から構内に入ったが、病院の裏庭は一面の芋畑で、そこに白衣の傷病兵が三、四人倒れていた。B29は日赤を目標にしたのか! 原子爆弾など思いもよらなかった私は、そのような行為を行なった米機がやたら憎らしかった。本館の裏口から入って驚いた、散乱したガラス片、血を流しながら倒れている患者、看護婦・医師、破損した医療機器類、無傷で救護に当たっている人たちがも右往左往、足の踏み場も